マルサス對リカアドウ

穀物論争

——主としてリカアドウの論説を中心として——

小松幸雄

はしがき

私はさきに同じ題名の下で、主としてマルサスのこれに關する論説を中心として述べるところがあつた。[1] 小論は言わばその續稿とも言うべきもので、リカアドウの夫れを論述せんとするものであつて、私の意圖するところは、前稿にのべた所と少しも變らない。前篇において扱つたところのこの論争の主張がなされたマルサスの三部作に對して、リカアドウは先ず「低廉な價格が資本の利潤におよぼす影響についての一試論—輸入制限の不得策を示し、あわせてマルサス氏の二近著『地代の性質と增進に關する一研究』および『外國穀物の輸入を制限する政策に對する意見の諸根據』を評す」、(一八一五年)——をものした。更に直接この論争のためと言うよりも、已に實施を見た穀物關税を中心として、一般に農業保護政策に對する批判書として「農業に對する保護について」(一八二二年)が書かれた。この外、この穀物條例を繞つての各種の經濟諸問題が二人の間に交換された

手紙によつて論爭された。これ等はボナー編「リカアドウのマルサスへの手紙」（一八一〇—一八二三年）一八八八年によつて取纒められ、貴重な文獻となつている。更にリカアドウの「原理」（第一版一八一七年、二版一八一九年、三版一八二一年）があり、これと共にマルサスの「原理」（第一版一八二〇年、第二版一八三八年）も擧げられることは說明するまでもなく、又「リカアドオのマカロックへの手紙」も見落せない。私は以上の諸文獻に導かれつつ兩者のこの穀物論爭に關聯するものを手探りつつ論述を進めて行くであろう。

斷るまでもなく、リカアドウの經濟學體系は、最初、當時の社會における切實な問題を投げかけた地金問題を論述することからして展開したのであるが、更に同じく穀物條例改正問題を繞つて、それが發展・深化されて行つたものであると見られる。卽ち穀物價格の騰落が、如何に勞賃の高低を通じて利潤に影響するかを討究し、更にこれと地代の關係を通じて、結局彼の全理論が分配論を中心として、而も地代理論を中心として展開しているのであることも、ここに說明するまでもなく周知の事實であると共に、一方リカアドウは農業資本主義關係をば資本主義生產の典型的關係としたとも說かれるところである。[2] 又穀物價格の追及から、價格を決定するものが勞働力に求められ、結局彼の勞働價値說へ到達するに至つたことも一般に認められる所である。卽ちリカアドウ自身も「原理」の序において自己の學說について、何處に力點を置いたかを明示している所からしても明かであろう。[4] だからリカアドウがこの穀物論爭において展開した政策論の理論的根據が、結局彼の價値論から出發して、穀物價格論、地代論、利潤論に關聯して來ることは容易に理解される所である。そしてこれ等のものの對抗關係が、彼によつて解明されたうえに政策論へと到達するものである關係上、小論の展開も、この順序をとるであろう。

(1) 同志社大學經濟論叢、三卷四號
(2) 舞出長五郎、經濟學史概要　上　第五章參照。
(3) 堀經夫　リカアドオの價値論及びその批判史、第二章以下參照。
(4) リカアドウ　小泉信三譯　經濟學及課稅之原理　三頁序參照、以下引用は同譯を使用。

一　穀物價格論――價値論

A　穀物價格論の展開

リカアドウがマルサスと多くの點において對立したが、人口增加の自然的性情についてはこれを社會法則的に容認し、マルサスと共に憂鬱經濟學者列傳中の人であることは周知の事實である。この人口增加の法則を特殊事例とすることが出來ず、リカアドウの特性的性癖よりして一般的法則として抽象化し、彼が社會の發展と共に、穀物價格の漸騰を豫定したことも明かである。而も彼はこの傾向をスミス的或はマルサス的の封建的思想の殘滓を拭拂して、資本制社會制度の本質剔抉に徹底し資本主義社會の進歩に伴ふ資本の蓄積增大は、結局勞働の需要を呼び、人口の增大を齎すことを社會法則にまで發展させたのであつた。從つてこの人口增加によつて生ずる穀物需要の增加は、必然に劣等地の耕境擴大となり穀物價格の騰貴を齎すものとしたのである。

「穀物の價格が永續的に騰貴しうるのは、一に之を生產するに追加勞働を要すること、生產費の增加せることに因るものである。同じ原因は必ず地代を騰貴せしめ、從つて穀物生產に伴う費用の增加することは地主の利益となるものである。然し乍らこのことは消費者の利益にはならぬ。穀物を購入するは常に貨物か貨幣かをもつて

するものであるから、消費者にとつては穀物は貨幣及び穀物にとつては低廉であることが望ましいのである。製造家にとつても亦穀物の高價なることは利益でない。それは穀物の高價格は高賃銀の原因とはなりうるけれども併し彼の製造品の價格はこれを騰貴せしめぬからである」[1]ここに彼の意見は端的に示されているが、かかる思想は彼の諸著作中あちこちに見出されるところであつて、「人口增加して從來よりも惡い土地が耕作圈內に加えられてくるに比例して、生產物を獲得する經費――穀物によつて測りたる――に對して、その生產物が保つている割合が增大する[2]」とか「一國の富と人口とが增進している間にあつても、もし穀物の貨幣價格と勞働賃銀とが、いささかもその價格において變化しないとしても、なお利潤は下落し、地代は騰貴するであろう。というのは粗生產物の同一供量を獲得するためには、より多くの勞働者が、より遠隔の、ないしはより肥沃度の劣る土地で使用され、したがつて一方で生產物の價値が同一であるままなのに、生產費が增大するであろうからである」とか或は「また穀物の價格騰貴の唯一の恒久的原因は、同一量の勞働支出により同一量の生產量がえられないやうな、より劣等な土地を耕作する必要から起るところの生產上の增加せる費用であると言うことも認められてゐる[3]」として、結局リカアドウは穀物の價格騰貴の原因を直接的には劣等地の耕作に基ずく、費用の增大という點を强調し續けたのであつた。

(1) リカアドウ　原理　小泉譯　三二九頁。
(2) ボナア編　リカアドウのマルサスへの手紙上卷一二六頁。
(3) リカアドウ　穀物の低廉な價格が資本の利潤におよぼす影響についての一試論（服郎一馬譯　リカアドウ農業經濟論集所收―以下―試論と省略）二〇頁。
(4) リカアドウ　農業に對する保護について（服部一馬譯　リカアドウ　農業經濟論所收―以下農業保護論と省略）六三頁。

B　兩者の價値論の爭點

斷るまでもなくマルサスが食料高價の一原因を購買力の增大に歸し、限界購買力說をうちたてたこと、そして彼の需要供給說が單なる需要供給說でなく、需要の側に重きをおく說であることは彼の「食料高價論[1]」において明にされた所である。彼が購買意思說を稱え、購買者の欲望と嗜好が有效需要、ひいて食料の價値に影響することは、其後「原理」においても明瞭にのべられている。「貨物が常に貨物と交換せられるということは事實上、決して眞實ではない。多量の貨物は生產的勞働が個人的奉仕かに直接に交換せられる。そしてこの貨物量が、それと交換せらるべき勞働と比較して、過剩のために價値が下落し得ようことは、或る一貨物が、勞働か貨幣かに比較して、供給の過剩の爲めに價値が下落するのと正に同樣であることは、全く明かである[2]」とか「欲求が節儉によつて減少しているのに生產物が大いに增大することは、必然物に勞働で測定せられた價値を大いに下落せしめなければならず、その結果同一の生產物は假令以前と同一分量の勞働を要費したとしても最早同一分量を支配せず、その蓄積の能力と蓄積せんとする誘因との兩者は甚だしく妨げられることであろう[3]」とか、更にこれに續いて「それに使用せられた勞働に比例して通常よりもより高い交換價値を有する所の、市場に投ぜられたる一新貨物が、已に需要を增大せしめるに至るものなることは、容易に認められるであろう。蓋しそれは單なる分量の增大ではなく、その生產物が社會の嗜好、欲求及び消費によりよく適合することによる價値の增大を意味するからである[4]」と述べてゐる。

右の引用句においてもその一端が知られるやうに、彼が購買者の欲望及び嗜好が價格に大きな影響を與えること

をと強調して、リカアドウが投下勞働量をもつて價値を決定し、客觀的な生產費說をとつたのと常に論爭を繰返したのであつた。「貴下は十分に生產物の價格に注意せずして、殆んど專ら生產出費のことのみを考慮し、そして人間の欲望や嗜好が價格に影響し從つて資本を有利に使用する方法に影響することを甚だしく輕視して居られるやうに私には思われるのです[5]」と指摘するのである。これ等に對してリカアドウは「私には斯う思われます。穀物の相對的價格が穀物を生產するのに以前よりも多量の勞働が必要となることから騰貴を來す場合が種々あるが、私の表のすべての場合に當てはまるものであると。またこれ以前の如何なる事情のもとでも、諸商品の生產に必要な勞働が減じたために、その價値が下落するということがない限り、たとい需要がどれほど大きかつたとしても、穀物の相對的價格の騰貴は起りえないものであると[6]」それに續いて同一手紙の中でも「正直にお話ししますと貴方が假定なさつた事情のもとで、穀物を獲得する上からの利便からでなくして、製造業品の價値の騰貴から、穀物の相對的價値が下落するということは、起りえないと思われます[7]」と說いて需給關係から生ずる價値の增減に對して反駁したのである。彼リカアドウはあくまで「私の意見は、穀物の交換價値はただその生產の現實的經費が增大するときにのみ永續的に騰貴しうる[8]」とか「もしも以前よりも多數の勞働者が雇われるということなくして穀物の價格が騰貴したとせば、貴下の命題は論駁する餘地がありますまい。しかし穀物の價格の騰貴の原因は、ひとり生產の經費の增加にあるのであります」の如く到る所彼の生產費說を明言しているのであるが、この生產費の基準をなすものが勞働量であり、地代の發生しておらぬ土地における最大の勞働量をもつて生產される穀物であつてこれが又勞賃と利潤に分割されることは、今更說明するまでもない。

「人間の勞働に依つて增すこと能わざるものは別として、有ゆる物の交換價値の基礎は眞にこと（勞働量）に在

りと言うことは、經濟學上に於ける最も重要な致義である[10]」「諸貨物に實限せられた勞働量がその交換價値を左右するものなりとすれば、勞働量の增加は、毎にそれに加えられたる貨物の價値を增大せしめ、同樣に其減少は必ず之を低減せしめなければならぬ[11]」等々彼が投下勞働價値說を貫徹し純化したことに就いては已に多くの著書によつて論じ盡されているところである。[12] この點マルサスが價値論において徹底せず、最初價値尺度として勞働と穀物の中項を、更に勞働價値說を次いで「價値尺度論」において貨物が支配する勞働は、その自然及び交換價値の標準尺度と考えていいという結論に到達したので、「この問題に關する私見を現在の形で發表するのは正しいと密に考えた次第である[13]」と緒言に明言し、結論的に「だから諸貨物の支配する勞働は、その價値の標準尺度と考えていいと言う一般命題に對する數々の例外はそう見えるだけであつて、眞實のものでなく、すべて矛盾なく說明される[14]」として支配勞働價値說をとるに至つている。又同一書で「需要及び供給の一般問題に關しては、諸貨物の價格についても、また富の增進は需給間の適正比例如何に懸るという點に關しても、需要及び供給をその普遍的な絕對支配の地位に引き戻さなければならないことを示すだろう。貨物の原費が專らその生產に要した資本の現實の前拂ひから成るものとすれば——原費をそう見るのが最も自然な、正しい態度と思われる——貨物の價格も價値もともにこの前渡しにその量最も動き易い利潤を加えたものに比例するから、いずれもその前拂いだけでは決定されない。卽ちこのように定義を與えた生產費では定められないことが明かである。從つてわれわれは需要及び供給に據らなければならない。また他方において、生產費に利潤を含めるならば、勞働の價値の恒久性から、普通利潤は當然同一勞働量の生產物の普通供給と比較しての普通需要によつて決せられるから、需要と供給とは、この後の定義によれば、生產費の有力分子である。だから需要と供給との價格及び價値支配は、絕對

普遍だということが、その確かな結論でなければならない」[15]とも說いて需要及び供給の價値、價格支配をも認めていることは、前段にも觸れた所である。これ等に對し、リカアドウは已に早くも一八二〇年六月十三日附のマカロック宛書翰の中に「マルサス氏は實際一つの價値尺度に固執してゐません。あるときは財貨の騰落を語つて、その貨幣價値の騰落を云々し、あるときは財貨の騰落を財貨が勞働を支配する力によつて測り、またあるときはそれを財貨と穀物との交換價値によつて測定します。氏の眞實の尺度はそれ自身可變的です。しかもその程度において他の凡ての物の可變性にも劣らないのです。しかも氏はしたがつて氏の尺度がいかなる有用な目的にも如何に役立たないかを、自ら證明してゐることに氣がつかぬ風に、この可變性について語つてゐるのです[16]」と揶揄してゐるのである。また一方、ボナアが彼の編纂にかかる「マルサスへの手紙」の編者序文においても、「勞働の量が價値の主要なる原因ではなくして、『供給と需要』がより大なる眞理をもつて、それであると敍べることが出來る[17]」と指摘するところである。兩者は價値論においても益々離れて行つた觀がある。

(1) マルサス　食料高價論（堀經夫、入江奬譯）參照。尙　同氏　原理　第六章參照。
(2) マルサス　經濟原學理（吉田秀夫譯）下卷　八八頁。
(3) マルサス　同上、一九〇—九一頁。
(4) マルサス　同上、一九二頁。
(5) マルサス　リカアドウへの手紙（堀、入江譯、食料高價論中所收）五〇頁。
(6) ボナア編　リカアドウのマルサスへの手紙（中野正譯上卷）一五八頁。傍點は筆者。
(7)、(8)、(9)　ボナア編　上揭書、一五九頁　一二六頁　一二七頁。
註筆者挿入　リカアドウ　原理（小泉譯）九—一〇頁。
(10)　リカアドウ　原理（小泉譯）一一頁。
(11)

(12) 堀經夫、リカアドウの價値論及びその批判史。舞出長五郎。經濟學史概要、森耕二郎、リカアドウ價値論の研究。岸本誠一郎、勞働價値論。

註 マルサスの原理初版（一八二〇年刊）から再版一八三六年刊において變更。

(13) マルサス 價値尺度論（三邊清一郎譯）三三頁、一八二三年。

(14) マルサス 上掲書（三邊譯）七〇頁。傍點は筆者。

(15) マルサス 價値尺度論（三邊譯）七三頁。傍點は筆者。

(16) リカアドオのマカロックへの手紙（中野正譯）（岩波文庫）一三一頁。

(17) ボナア編 上掲書、下卷。二四〇—二四一頁。

C 價格政策論の發展

われわれは兩者の價値論の追及は本節の本旨でないのであつて、彼等の價格論を知る上についての言わば豫備段階である。從つてわれわれは兩者の價格政策についての對立の檢討に進まなければならない。

マルサスが穀物の高價格が農業生産のみならず一般産業は言うに及ばず勞働階級にとつても有利であると强辯した。[1] このことは裏を返せば穀物價格の下落は農業生産のみならず、國民經濟的に影響する所が頗る大であるとして、これに反對した所ともなるのである。「穀物の價格の下落は、資本の土地への使用を相對的に大いに阻害し、また人口を相對的に大いに刺戟したに相違ない」[2]を初めとしてそれは改良地の耕作放棄、農業資本の破壞逃避、[3] 地主の地代收得減少に伴う購買力減退、それによる國民經濟的困惑、其他各種の弊害が述べられたが、特にここで注意しなければならぬ言葉は、高穀物價格の勤勞階級に對する有利性についてである。卽ち「比較的に低き貴金屬の價値、或は高き穀物及び勞働の名目價格は、寧ろ商業及び製造業を阻害する傾向があるけれども、而

も、その效果は勞働の勞賃によつて生活するところの人々には永續的に有利であることが主張されうるであろう」[4]である。詰り彼は「二國の勞働者が同一量の穀物を稼得すべきであつたとすれば」と假定し、一國が他國より穀價が二五%だけ高ければ、前者は後者より廉い純外國製品及び外國產の原料や一部が外國製であり、從つて大いに海外物價に影響されるような商品の購買において、勞働者も有利であるとしたのである。更に彼は他書において、穀物の高い貨幣價格は生活の便宜品、享樂品の購買上、勞働者に極めて大なる利益を與えるものであると述べ、[5]下層階級はそれが比較的少くても、それ以上のものは生活必需品として茶、砂糖、綿布其他多くの外國品の購入上有利であると說くのである。詰り彼は「生活の必需品便宜品、及び享樂品に對する勞働の支配力のみを考察しなければならない」[6]そして後にも說明するように、この勞働の價格を引上げるためにはそれの需要の增大を計らなければならないとした。從つて農業投下資本の破壞の如きは嚴につつしまなければいけないとするのである。ここにおいては、尙當時の英國における產業構造上沒落しつつある斜陽產業だといえ農業がもつ比重の評價が、マルサスにおいては大であつた見られるのであろう。又マルサスにおいては（地主、農業者の）有效需要の維持―製造業の繁榮―高穀物價格の必要を力說したと見られるわけである。

以上のマルサスの說に對し、リカアドウは「穀物價格の騰貴が舊來の土地の生產物の相異つた分配を生ぜしめるという點では、私は貴下に同意します。それは利潤を引下げることによつて、これを爲すものです」[7]と先ず利潤と穀物價格騰貴は對抗し、更に「そして私は穀物の價格の騰貴は賃銀を增大させることによつて、常に一般的利潤を引下げるという意見であります」[8]としたのである。「事物の通常の推移においては穀物の高い價格は、進歩の狀態に伴うものでありますから、[註]勞働賃銀は現實的に高くなりませう。そして利潤が賃銀の低いが故に騰貴

するということは有り得ないことです」[9]とし、又

註　リカアドウの資本主義の發展理解において、資本の蓄積に伴う勞働需要の增加、從つて人口の增加を齎し、これは穀物の需要增加を意味し、結局劣等地の耕作を促し穀價騰貴を齎すコースをとるとする。

「一國の富と人口が增大している間にあつても、もし穀物の價格と勞働賃銀とがいささかもその價格において變化しないとしても、なほ利潤は下落し、地代は騰貴するであろう。と言うのは粗生產物の同一供給量を獲得するためにより多くの勞働者が、より遠隔の乃至より肥沃度の劣れる土地で使用され、したがつて一方で生產物の價値が同一であるままなのに生產費が增大するであろうからである」[10]高穀物價格、高賃銀を衝きその原因として生產費の增大――肥沃度劣る耕地の利用を鎗玉に上げるのである。

そして「私は無論貴下がかかる高物價とともに、わが國は自國の商品の一定量と交換して、以前よりも大なる分量の外國產諸商品を支配するようになろうと言つていらつしやるのに、同意しませう。けれど私は第一に、穀物が騰貴したが故に諸商品が騰貴するという點を承認することが出來ません。また第二に、かりにそういう具合に騰貴したとしますと、その騰貴した價格をもつて外國人に對して同じ分量だけ販賣しうるというものは非常に僅かしかないのであります。そしてわれわれが外國人に對して販賣するところのものが以前よりも少くなれば、また彼等から買いうるものも少くなり、斯くしてわが國の一般貿易は障碍をうけることになりましよう。私は一般低物價に伴う利益は數々認めますが、高物價には何らそれを認めることが出來ません」と應答した。またマルサスが價格下落の影響は比例的に產業を萎縮せしめるものだとし、又價格の騰貴は一般に貨幣の減價に伴う弊害を埋め合すものだとの說に對して、リカアドウは「よりよい貨幣制度への復歸はきわめて望ましいが、社會の商

業部門を萎縮せしめることによつて、蓄積と産業とに對し一時的支障を與える傾向があり、それは價格下落の影響であると言われている。マルサス氏はかかる影響が穀物價格の下落によつて生ずるであろうと考えている。もしヒュームによつてなされた考察が充分に根據あるものとしても、それは現在の場合には適しないであろう。――なぜなら製造者が販賣すべきものは何れも今まで通り高價であり、廉くなるのは彼が購入すべきもの、卽ち穀物と勞働だけであつて、それにより彼の利潤を增大するであろうからである。私は再度貨幣の價値の騰貴はすべてのものを低廉にするが、これに反して穀物價格の下落は勞働の賃銀を低めるだけで、したがつて利潤を高めるものであるということを述べなければならない[12]」そして彼は結論的にもし商業階級の繁榮が最も確實に資本の蓄積と生産的産業の促進とに導くものであるとするならば「それはいずれの方策にもまして、穀物價格の下落こそ確實に達成し得るのである」として、穀價の下落こそ商業階級のみらず一般産業の振興策となりうると見るのである。詰りリカアドウにおいては生産費の減少――低穀物價格の政策こそ繁榮へ通ずる途であるとする。

われわれは兩者の價値論が異り從つて價格論の違いが起り、結局その政策及び影響も異る見解に立つことを知るのであるが、價値論、地代論、勞賃論は密接に有機的に社會經濟學的に說明される可きであるので、此等兩者の相違點については後論に讓り、更に別稿を俟たなければならない。

(1) マルサス　外國穀物輸入制限政策に關する意見の根據（鈴木譯）一三六頁以下。
(2) マルサス　穀物條例論（鈴木鴻一郎譯）二五頁以下。
(3) (4) マルサス　上揭書（鈴木譯）一九一頁以下、四一頁。
(5) マルサス　外國穀物輸入制限政策に關する意見の根據（鈴木譯）一三七頁。
(6) マルサス　前揭書（鈴木譯）一三七頁。

(7)(8)(9) リカアドウ　マルサスへの手紙（中野譯）一四〇頁、一四二頁、一四三頁。
(10) リカアドウ　一試論（服部譯）一九―二〇頁。
(11) ボナア編　マルサスへの手紙（中野譯）上巻　一七一頁。
(12) リカアドウ　一試論（服部譯）五〇頁。

二、地代論――地主論其他

兩者の論爭が地代論においてハツキリ對立したことは周知の事實で、これの議論が實は穀物論爭の核心でもあるのである。

マルサスの地代論が重農學派的色彩を脱し切らず封建的殘滓を帶びたことはここに說明するまでもない。マルサスも差額地代論の提稱者として學史上、リカアドウと共に不朽の名を留めたのであるが、兩者はその地代の源泉については、前者は自然法則としたのに對し、後者はこれを社會法則として理解したのであつた。マルサスはこの點を縷々說明して、結ぶに「かくして地代は土壤及びその諸生產物の特定の性質の結果である所の、土地から生ずる一般的剩餘と同一の共通の性質にその由來が求められるわけである」[1]然し此等の說に對してリカアドウが、地代の因つて生ずる源泉を社會法則の裡に求め、有名な命題を確立したことはここに詳述するまでもない。敢て引用すれば、卽ち「されば原生產物の比較的價値が騰貴する理由は、その取得せらるる最終部分の生產に一層多量の勞働が投ぜらるるからであつて、地主に地代が納附せられるからではない。穀物の價値は、彼の地代を支拂わぬ土地に於て、若くは地代を支拂わぬ資本部分をもつて生產を行う場合のその生產に投ぜらるる勞働量に由て左右せらるるものである。穀物は地代が支拂われるから高價なのではなくて、穀物が高價だから地代が支拂

われるのである。假りに地主がその地代の全部を放棄しても、穀物の價格は毫も低落せぬであろうと言われているのは、當を得たものである」[2]この命題に達する前にも、リカアドウはマルサスへの手紙において屢々彼の所信を明かにしたのであつた。卽ち「原理」（一八二〇年）の出版前一八一五年二月において已に「私はまた地代は富の創造ではないと思います。それはつねにすでに創造された富の一部であつて、必然的に蓄財の利潤を犧牲として享受されるものであります」とか、一八一七年一月二四日附の手紙においても「地代は富の創造でなくして、富の移轉であります。それは地代が高い【穀物の】[註]價格の結果であつて、その原因ではないという事實の必然的歸結であります」[3]とか指摘して、地代の本源を衝いたのであつた。同じく一八一五年出版の「一試論」においても「そこで地代はすべての場合、あらかじめ土地でえられた利潤の一部分である、ということになる。それは決して新らしい收入の創造ではなく、常に既につくりだされた收入の一部分なのである」と同一趣旨をのべている。又「然るに穀物價格の決定者たるものは彼の最大の勞働量をもつて生產せらるる穀物であつて、地代はその價格の組成要素中に入らず、又入ること能わざるものである」[5]として愈々地代の本質を明瞭にした。別書においても「優良地で產出される量の價値と劣等地でのそれとの間の差は、常に地代を構成するのである。だから優良地の占有者の利潤と劣等地の占有者のそれとは同一であろう。しかし最良地の地代は最劣等地の地代を同額の經費で收穫されうる生產量の差額だけしのぐであろう。地代は穀物の價格の騰貴の結果であつて、その原因ではない」[6]と同一のことを繰返しているのである。

われわれはこれ以上、リカアドウの地代の源泉論について引用句を羅列する必要はないであろう。われわれの指摘せんとする所が、兩者の間に地代の本質理解において相對立するものがあり、從つて茲に論據を求めた兩者

が一方において穀物貿易の保護、自由の論爭を展開したことは已にのべたところである。マルサスの地主擁護論に對しリカアドウの製造業者保護論と見做されることは、今更說明するまでもない。「富の生產には積極的に寄與しないけれども、彼等ほど利害關係が國家の繁榮と密接に結びついた社會階級はないのである[7]」とか「土地に投下された各五千磅は、通常の資本利潤を償うのみならず、更に地主の手に歸するところの追加的の價値をも生ずる。而てこの追加的の價値は特定の個人、或は一組の個人にとつてのみ利益であるのではなくして、その國の製造品に對して最も確實な國內需要を、その國の金融上の支持に對しては最も有效な基金を、更にその國の陸海軍に對しては處分しう可き最大の兵力を提供するものである[8]」とかの言が端的に表現するように、マルサスが地主擁護の立場に立つたことはここに縷說を要しない。リカアドウが單に經濟主義に偏向し、「一切の思索の支配原理は、彼から言えば、經濟的思索によつて決定されている。そしてその結果が、政治學並びに經濟學における個人主義である[9]」とするに對して、マルサスの場合は「國民性の原理に對する深い專心によつて並びに廣い範圍の哲學的關心によつて、經濟的個人主義が抑制されている[10]」ところに異彩が生ずるのである。だから、リカアドウにおいては「地主の利害は常に凡ゆる他の階級の利害に反することになる。彼の地位は食糧の缺乏して高價な時に最も隆盛を極め、これに反してすべて他の人々は食糧を廉價に獲得出來れば、大いに利益をうける。高い地代と低い利潤とは互に相ともなうものである[11]」マルサスが穀物輸入は「商工業者の中、直接に外國貿易に從事する人々のみは、輸入制度を利益とするであろう[12]」と考へたのに對し、リカアドウは「地代について述べられた見解が正しいとすれば――すなわち、もしもそれが、一般利潤が下落すれば騰貴し、一般利潤が騰貴すれば下落するならば――そしてもし穀物輸入の影響が、マルサス氏自身によつて容認され且つ見事に例證されたように、地

代を低めることにあるとすれば、――産業に關係する人々はすべて――すなわち、農業者であろうと製造業者であろうと、また商人であろうとを問わず、資本家たるものはいずれも、利潤の大なる増加をうけるであろう。[13] 農業における改良あるいは輸入の結果としての穀物價格の下落は、穀物の交換價値のみ低め、その他何れの商品の價格も影響をうけないであろう。だからもし勞働の價格が下落するならば――穀物の價格が低下する場合には必ずそうなるのだが――あらゆる部門の實質利潤は高まるに相違ない。そして社會のうちで、製造業者および商業者層ほどに著しく利益をうけるものはないのである」[14] そしてリカアドウは假りに地主の側における地代の下落のために、彼等によつて支持されている國内需要が減少しても――これの減少を、彼は指摘して不況が來、一般産業に及ぼす惡影響を強調したのであつたが――これは、商業階級の増大する富裕によつて、はるかに大きな増加が見られると主張した。彼リカアドウが工商業者の利益重視の立場に立つたことは明かである。彼は「地主の利害は常に消費者及び製造業者の其と相反するものである。穀物の價格が永續的に騰貴しうるのは、一に之を生産するに追加勞働を要すること、その生産費の増加せることに因るものである。同じ原因は必ず地代を騰貴せしめ、從つて穀物生産に伴う費用の増加することは、地主の利益となるのである。然し乍らこの事は消費者の利益とはならぬ。製造業者にとつても亦穀物の高價なることは利益でない」[15] 彼が單に製造業者の利益を擁護の立場をとつたのでなく、一般消費者階級にとつても、低穀物價格が有利としたのである。彼は更に穀物輸入について「劣等な土地の農業者達が損失者となることは疑う餘地がないが、然し公衆はその失つた額の數倍もの利益をうるのである」そうして土地から製造業への資本の交替が行われた後には、農業者自身も地主を除く社會のすべての他の階級と全く同樣にその利潤を非常に増大するであろう」[16] として、農業者も低穀物價格を有利とし、更に小

作農も同様であるとしたのである。これは恰もマルサスが、低穀物政策で眞に利益をうけるものは、貿易業者だけとしたに對し、リカアドウが高穀物價格の受益者は地主階級だけだとしたのと、その極論において相似たものがあると言えよう。各々自己の說を强調するあまり議論がここまで飛躍したと見られる。

(1) マルサス　地代の性質（補井譯、穀物條例論所收）一二五頁。尙　マルサス原理　第三章參照。
(2) リカアドウ　原理（小泉信三譯）五五頁。ボナア編　リカアドウへの手紙（中野譯）上卷、一一二頁。
(3) ボナア編　上揭書、下卷、一一頁。
(4) リカアドウ　一試論（服部一馬譯）一五頁。
註　筆者挿入
(5) リカアドウ　原理（小泉信三譯）　五八頁。
(6) リカアドウ　農業保護論（服部一馬譯、農業經濟論所收）六三頁。
(7) マルサス　外國穀物輸入制限政策に關する意見の根據（鈴木譯、穀物條例論）一四七頁。
(8) マルサス　根據（鈴木鴻一郎譯）一四六頁、一四七頁。
(9)(10) ボナア編　マルサスへの手紙（中野譯）下卷、編者序文、二二三頁。
(11) リカアドウ　一試論（服部一馬譯）二三頁。
(12) マルサス　外國貿易輸入制限政策に關する意見の根據（鈴木譯）一四三頁。
(13)(14) リカアドウ　一試論（服部譯）四八頁、四八頁。
(15) リカアドウ　原理（小泉譯）三二九頁。
(16) リカアドウ　一試論（服部譯）四三—四四頁。

三、利潤論——過剩恐慌論

リカアドウが地代の本質理解においても、犀利な頭腦を示したことは、已述のようであるが、利潤の理解に對

してもスミス、マルサスを抜いたのであつた。彼は「貨物の價値全部は二個の部分のみに分たれる。一は資本の利潤を成し、一は勞働の賃銀を成すのである」[1]として勞賃と利潤が加えられて物價を作るのでなく、物價が利潤と賃銀とに分けられることを確言したのである。從つてここに利潤と勞賃の對抗關係の存在を剔出した。又「何れの場合においても七二〇磅という同一額が賃銀と利潤とに分割せられねばならぬことも理解せられるであろう。若し土地に生ずる原生産物の價値がこの價値を超過すれば、それはその額の如何を問わずして地代に屬する」[2]として利潤は地代とも對抗關係に立つことを解明にしている。而て彼は利潤論の結論として、「賃銀の騰貴は諸貨物の價格を騰貴せしめずして、必ず利潤を下落せしむ可きこと」[3]を說き、「地主及び勞働者への支拂を濟した後の土地生産物殘餘量は、必然農業者の有に屬して、彼の資本の利潤を構成する」[4]と說いている。「利潤率は賃銀下落による外斷じて增加することなく、又賃銀の下落は賃銀がそれに費さるる必需品下落の結果としての外起り得ないということは、予の本書全卷を通じて說明せんと努め來つた所である」[5]とか、「利潤率と利子率とは生産にとつて必要なる消費に對するこの生産の割合にかかつているはずのものですが――この割合はまた本質上、食糧品の低廉性にかかつており、この食糧品の低廉性こそ、われわれがその間に如何なる中間を容認じようとするにせよ、結局勞働賃銀の一大調節者たるものであります」[6]マルサスが穀物高價格は一般大衆にも（英國の當時の實狀においては）有益であるとしたに對し、リカアドウは徹頭徹尾低穀物價格・卽低賃銀・卽高利潤の考え方を捨てなかつた。

「高い賃銀はそれが一般的の場合には、農業者、製造業者および商業者の利潤に等しく影響するだろう。賃銀を低く保つこと以外には、利潤を高く保つ方法はないのである。利潤の法則に關するかかる見解において、賃銀

に極めて影響するところの穀物のごとき不可缺の必需品は、低廉な價格であることが如何に重要であるか、そして輸入禁止によつてわれわれが增大する人口を養うために、より劣等な土地の耕作へ追込まれることが、社會一般にとつて如何に有害であるに相違ないかということが、直ちにわかるであろう。[7]」

又「すべての貯蓄は利潤から作られるのであるから、そうして一國は急速な進歩の狀態に在る時に最も幸せなのであるから、利潤と利子はいくら高くなつても高過ぎることはない。地主達がより少い犧牲で抵當借りの貨幣を調達することが可能とされるということは、全く一國にとつては低い利潤と低い利子とに對する貧しい慰めであろう。高い利潤ぐらい一國の繁榮と幸福とに多大の貢獻をするものはないのである。[8]」リカアドウが資本主義社會の構成員が偏向的利己心をもち、社會の進歩の原動力を資本の蓄積、利潤の遂及に在りとした所よりして、利潤の蓄積が一國の繁榮とつながるものと考えたことは當然であろう。このことは卽ち資本家、製造業者の擁護が卽ち一國の繁榮を齎すものを意味するのである。恰もマルサスがさきに指摘したように、純所得としての地代の取得者たる地主階級の利害關係が、國家の繁榮とより緊密に關聯している階級はないとしたのと好一對と言う可きであろう。同じような意見はあちこちに述べられておるのであるが、高利潤擁護の立場から高賃銀と高地代に反對したリカアドウは、「さもなければ必要であろうよりも多量のわれわれの勞働を食糧の生產に充當し、その結果、利潤を低めることにより、われわれの享樂の總量と貯蓄力とを減らす、という不得策に加えて われわれは資本家達に、この國を去つて賃銀が低く利潤が高い所へ彼等の資本を移さしめるような不可抗的な誘因を與えることになる。假りに地主達が穀物の價格は確實に高いまでであると確信しうるならば――幸いにも彼らはかように確信しえないが――彼らは社會のあらゆる他の階級に對立した利害關係を有することになるであろう。なぜ

なら生産の困難なことから生ずる高い價格が地代騰貴の重な原因となるからである」[9] 又續けて曰く「そこで高い而も安定した穀物の價格が地主にとつて最も有利であることがわかる。しかしわが國のような立場にある國では、安定性ということは、他の諸國と比較してのわが國の高い價格とはほとんど兩立し得ないのであるから、より適度な價格のみが實際には彼の利益になるのである。穀物の低廉な價格は農業者および社會の他のあらゆる階級の利益である、ということほど明確に立證されうるものはない。高い價格は低い賃銀と兩立せず、高い賃銀は高い利潤と併存しえないのである」[10]

斷るまでもなく、マルサスは利潤を說明して「資本の利潤は生産された貨物の價値とそれを生産するに必要な前拂の價値との差額よりなる」[11] と說き、「生産物の價値が前拂ひの價値に比較して大である時には、超過は大であるから利潤率は高いであろう」[12] としている。この點リカアドウが已述のように「貨物の價値全部は二個の部分のみに分たれる」[13] として、投下勞働力の全價値が分れて利潤と勞賃を形成するとの考えに相へだたるところはない。マルサスも勞働が價値の本源と考えていることは前述の通りである。だから上述の命題だけに關して說けば問題は混亂せぬのであるが、ただ彼は地代を純所得として、土壤の恩惠に歸した點がリカアドウと明かに異る點である。だからマルサスによれば貨物の價値の中に地代が含まれるのであるが、リカアドウにおいては、それは含まれず、從つて利潤においても兩者異るものが考えられる。殊にマルサスにおいては需要供給の原則が利潤をも支配して、その高低を左右する所が大であると說く。「略言すれば、生産物の總體が分割される三大部分たる地代、利潤及び勞賃の中で、その前二者は、土地の供給と資本の供給との兩者が、需要に比較して豐富であるから低いであろう。然るに勞働の賃銀は、勞働の維持のための財本が、勞働者の供給に比して大いに豐富であるか

ら極めて高いであろう。かくして各々の價値は需要及び供給の大原則によつて左右されるであろう」詰り進歩しつつある社會においては、資本の蓄積は人口の增大よりも急速であつて、從つて利潤は一般に低下の傾向に在り、勞賃はこれに比して、增大の傾きがあるとして需給の作用を免れぬとした。この點已に價値論において兩者の意見の相違を述べたが、利潤論においても同樣の傾向を認めることが出來るといえよう。

兎に角リカアドウは勞働價値の一分割分としての利潤と勞賃を他の一分割分と考えたに對し、マルサスはこれを一應認めてもやはり需給說にひかれて行つたのであつた。リカアドウはその手紙において「然し乍ら貴下が蓄財の利潤及び勞働賃銀に對する地代の關係を別々に考察していらつしやらないのを、私は殘念に思わないわけには行きません。貴下は前二者の地代に對する共同の影響を取扱われることによつて本來明瞭ならしめうるはずの問題を、それほど明瞭になさらなかつたように思います」[14] として三者の二角關係でなく三角關係を明瞭にしているのである。

次にわれわれは、兩者の資本の需給について見る必要があろう。卽ちマルサスは穀價の下落によつて惹起された最初の農業恐慌によつてひき起された投下資本の破壞について、國民經濟上の損失浪費を强調するところがあつた。[15] これに就ては已に一部關說したところであるが、リカアドウは農業で喪つたものは、穀價の廉いことによつて他の產業が被る利益のために十分償いうるとしたのであつた。而もマルサスは農業から引揚げられた資本の需要が果して存在するや否やに大きな疑問を懷いたのであり、地主階級の沒落は國家の安危にも關すると考えた。

註　最初の農業恐慌は一八一五年ナポレオン戰爭終結と共に英國農業を襲い、續いて一八二五年の一般恐慌、其後についての週期性は周知の事實。

マルサスはさきにも説明したやうに、過剰の貨物の生産は需要を見出しえず、過剰生産となりうると説いたのに對し、リカアドウ、セイ等が部分的生産過剰は認めても、一般的過剰生産を認めなかつた。然しマルサスは「貨物は常に貨物と交換せられるということは、事實上、決して眞實ではない。多量の貨物は生産的勞働か個人的奉仕かと直接に交換せられる。そしてこの貨物量が、それと交換せらるべき勞働と比較して、過剰のために價値が下落し得ようことは、或る一貨物が勞働か貨幣かに比較して、供給の過剰の爲めに價値が下落するのと正に同樣であることは、全く明かである」更に又續けて「假定された場合に於いては、明かに以前には個人的奉仕に從事していた者が、資本の蓄積によつて、生産的勞働者に轉換せられたが爲めに、異常の分量の總ての種類の貨物が市場に在るであろう。然るに勞働者の數は全體として同一であり、そして地主及び資本家の間における消費の爲めに購買せんとする能力及び意思は假定によつて減少されているのであるから、貨物の價値は勞働に比較して必然的に下落し、延いては利潤を極めて著しく低め、そして暫くの間より以上の生産を妨げるに至るであろう。併しこれこそが正に過剰恐慌なるものが意味する所であり而もこの場合それは明かに一般的であつて部分的ではないのである」[17]

このマルサスの一般過剰恐慌説に對し、リカアドウが部分的過剰恐説は認めても、一般的の夫れを否定し、リカアドウは、消費の能力と意思のある場合常に必然的に需要は存在すると説き[註]、彼は人間の欲望の無限を信じ、從つて一般消費大衆の有效需要は減少しても、資本家階級の奢侈的消費に資本が投下されれば其處に一般過剰恐慌はありえぬと説いたのである。

「生産物は常に生産物又は勤勞によつて購買されるものであつて、貨幣は單に交換を行う媒介物たるにすぎぬ

ものである。特定商品があまり生産されすぎて、それに費された資本を償うほどの供給過剰が市場に起りうることはありうる。併しこれは凡ての商品においてはありえぬことである。穀物に對する需要は之を食うべき口によつて、靴や衣服に對する需要は之を被る人々によつて限られるが、併し一つの社會若くは社會の一部は、その消費しうる限り又は消費せんと欲する限りの穀物や帽子や靴を有することはありうるけれども、目然又は人工で生産せらるる凡ての商品について同じことは言われない。――此等の全部若くは幾分を消費せんとする願望は各人の胸裡に存するのであり、必要のものはただその手段であり、而てこの手段を與えるものは生産の增加より外にない[18]」とした。この點さきに觸れたように、マルサスも勞賃の高率維持は生産增强、即ち農業生産に投下した資本の破壞引上げを不可としそれ等の活用による需要增加に在りとしたのに對し、リカアドウは産業資本の擴大こそ、そして生産增强こそ、消費の刺戟をなすもので、購買力の創出と考えたのであつた。人間の欲望は無限であるため、必要なのは購買手段の創出であるとした。此等の考え方の底には、マルサスにおいてはアダムスミス以來の「製造業においては、農業と同一量の生産的勞働量が使用されても、決して農業におけるほど、大なる再生産をもたらし得ない」との見解を踏襲しているに對し、リカアドウは何等の地代をも生じないところの資本部分があるが、かような土地に使用される生産的勞働は、實際上、「製造業に使用される同量の生産的勞働ほど大なる再生産を決して供するものでない[19]」として製造業における資本の生産性を高く評價、從つて重視した點と對照される可きであろう。そして一方においてリカアドウは上來のべたような觀點に基ずいて、「資本は過剰にはなりえぬ」の主張がなされるわけであるが、而てマルサスが生産物の需要を增加させ、價値を昂騰させるために重視した不生産的消費の存在――これによつて過剰生産の發生防止することが出來ると信じたのであるが、然しこ

の不生產的消費を維持する主要階級としてマルサスは地主階級を考えたのである。[20] これに對しリカアドウは資本家階級の奢侈の存在が過剩生產を防止しうるものとして、一般過剩恐慌の存在否定の理由としたことは、已述の如くである。又、リカアドウが勞賃の一般低下の傾向を說き、從つて有效需要減退を認め乍ら、資本家階級の購買力を過大視した錯誤であつて、彼の學說に反し、其後一八一五年の農業恐慌以後資本主義は順還的の恐慌に見舞れるに至つてゐる。マルサスの地主階級過重視による錯覺と共にリカアドウの製造家階級偏重の過誤と見ることが出來よう。リカアドウが「一試論」の卷末において、「いずれか特定の階級に對して配慮がなされると、國の富と人口との發達を阻止する事になるのは甚だ遺憾であるということである」としてマルサスの地主階級擁護論を批判したのが、實はリカアドウは製造家、商業資本家階級擁護論に墮したと好一對であつて、共に科學の名において論爭されたことは、科學の悲哀であつた。マルサスが「英國の福祉は土地利益の增進を基調とする傳統的社會組織の維持に依存すると信じた」に對し、リカアドウは「英國の富裕は資本の豐富蓄積より生る可く、工業の自然的發展に對する障碍の除去こそ緊要であるとした」[21] のに正に對蹠的であることは、彼等の親交に拘らず夫々の立つ社會的地盤が異るところより來る不可避的の事實であつたろうか。

（未完）

(1) リカアドウ　原理（小泉譯）九一頁。
(2)(3)(4)(5) リカアドウ　上揚書、九六頁、一一一頁、九三頁、一一七頁。
(6) ボナア編　マルサスへの手紙（中野譯）上卷、六九頁。
(7) リカアドウ　農業保護論（服部譯）一〇〇頁。
(8) リカアドウ　農業保護論（服部譯）九六頁。

(9)(10) リカアドウ　農業保護論（服部譯）一〇〇頁、一〇二頁。
(11)(12)(13) リカアドウ　原理（小泉譯）八一頁、九一頁。
(14) ボナア編　マルサスへの手紙（中野譯）上卷、一一二頁。
(15) マルサス　穀物條例論（鈴木譯）四五頁以下。
註　上述本稿三八頁、三九頁參照。
(16)(17) マルサス　原理（吉田秀夫譯）下卷、一八八頁、一八九頁。
註　マルサス　原理（吉田譯）　一九三頁のリカアドウの註及び第二篇第二節全體參照。但しリカアドウはこの節を「マルサスの著書のうちもつとも反對す可き章は、けだし資本の過剩から來る惡影響とそれに由來するところの生産された財貨に對する需要の缺乏とに關する章です」とした。――リカアドウのマカロックへの手紙　一二二頁。
(18) リカアドウ　原理　二八五頁。
(19) リカアドウ　一試論（服部譯）五一頁。
(20) マルサス　原理
(21) 舞出長五郎　經濟學史概要、二二二頁。